# 気づいたら、ここに居た

## - まちの中に当たり前に存在する第３の居場所 -

## 00. - 出会い -

2022 年春、別の研究のために長田区を学生４人で歩いていると、まちの方にとある福祉施設に案内していただきました。
そこでは、長田に住む様々な方が、世代を超えて一緒に時間を過ごしていました。

『共感』 そこにいた皆さんが生き生きとしていて、介護現場の在り方にふさわしいと感じたこと
『違和感』 建築の自体はハコで、ソフトだけが充実していたこと、誰に対しても寛容ではあるが、やはり職員の方の家族や知り合いが多いこと

本提案では、今建ってる建築とは別の姿を考えてみようと思いました。

## 01. 提案

まちの『核』とは？

まちとは、人々が日常を過ごす場所で、
特定の誰かのためではなく
公共性を持つものであること

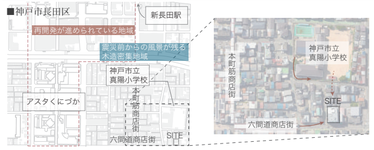
暮らしの中心に『核』があるべきだと
考えます

ふと気が付くとその場所に居た

日々の暮らしの一端を担うことでまちの中に、地域の中に、
当たり前に存在するような
第３の居場所を提案します

## 02. 対象敷地：兵庫県神戸市長田区

■神戸市長田区




長田区は、阪神・淡路大震災により甚大な被害を受けた。火災により更地となった場所では、急速に再開発が進められた。

対象敷地は、再開発エリアから外れた位置にある。震災前から残る商店街が近くに多く存在している。

## 03. 長田区のまち並み

現在の長田区住宅密集地 ▷

▽ かつての長田区の姿

写真提供：神戸市

長田区は、100 年以上残り続けている木造密集エリアと、高層マンションが立ち並ぶ再開発エリアが混在している。木造密集エリアでは、今でも住民の暮らし・生業が路地にあらわれている。

## 04. 敷地の特徴

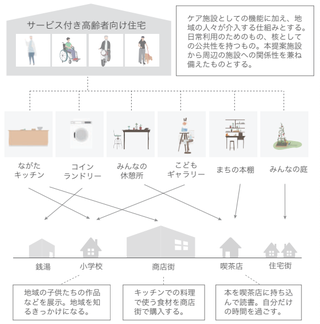
■小学校から見える

■行き止まりのない路地

敷地は、周辺の建物が低層であることもあり、神戸市立真陽小学校から見える位置にある。また、長田区の特徴として、路地に行き止まりがあると住民が怒る、と教えていただいた。実際歩くと、行き止まりはほとんどなかった。

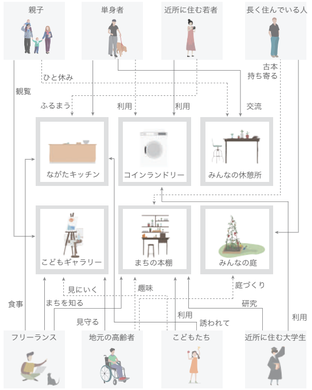
## 06. まちの核としての福祉施設

■提案施設と周辺環境との関係性




居住する高齢者と地域の人々を施設の機能で繋ぐ。ケア拠点でありながら、まちの中に当たり前に存在するような公共的な居場所とすることで、まちの核をなす。

## 07. まちのプレイヤーたち




## 08. まちに溶け込ませる

■まちの観察から見えてくるもの

人々の暮らし・生業の滲みが、今の長田のまちを作っていた。

■まちに溶け込む拠点

周辺施設の機能、まち並みから抽出した要素をによって拠点を形成する。

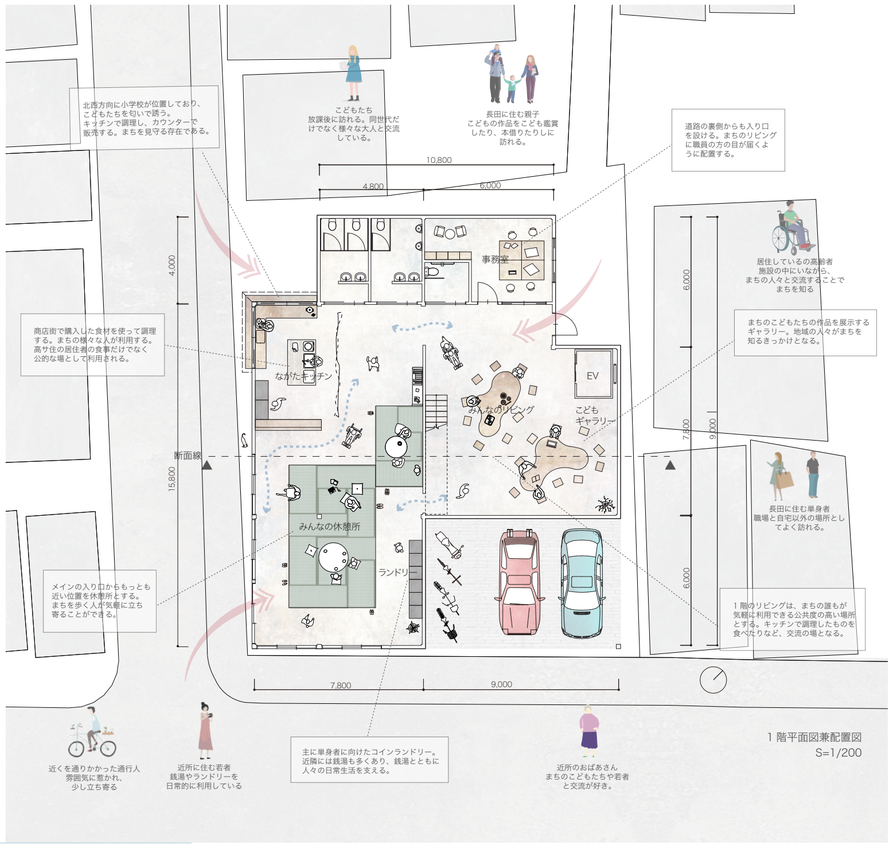
## 05. 動線とゾーニング

■平面ダイヤグラム

1. 敷地への動線
3 方向からの動線を考える。それぞれのポテンシャルを活かした配置とする。

2. 人を呼び込む操作
目的に応じた平面操作を行う。道に面した表にあるか、裏にあるかにもよる。

3. 平面配置
性質に合わせた機能を付与する。1 階にあるべき機能から順に計画を進める。




1 階平面図兼配置図
S=1/200

■まちの分析により抽出した要素

【見守ってくれてる】
長田区には、子供たちを大切にする地蔵盆という文化が続いている。まちに点在し、子供たちを見守ってる。

【表の顔、裏の顔】
大通りから一歩路地に入ると、見せている表情が一気に変わる。パブリックとプライベートを使い分けている。

【地域で助け合う】
震災による火災の影響で、まちに防災空地をおくように勧められている。まちの人々の共通認識となっている。

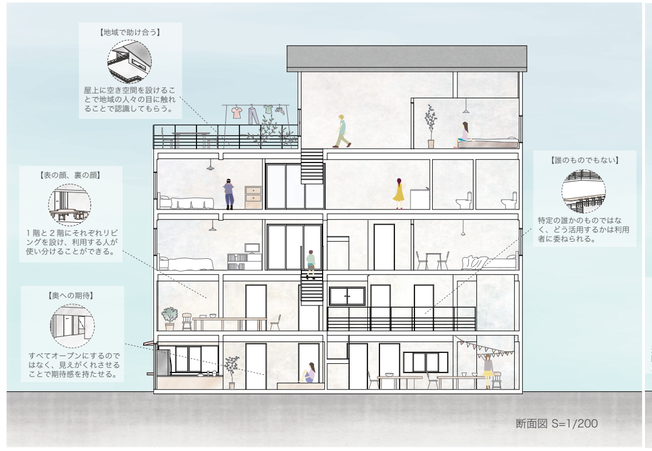
【奥への期待】
暗く奥が見えない場所がいくつもあった。恐怖心ではなく、向こうに何があるか好奇心を誘う空気感であった。

【みんなの庭】
路地には鉢植えなどが置かれ、まちを彩っていた。個人的な楽しみだけでなく、まちのためでもあると感じた。

【誰のものでもない】
電柱に貼られた張り紙、商店街に迷い込んだ猫。さまざまな国籍の方、飲食店も多く見かけた。これは昔からだそう。

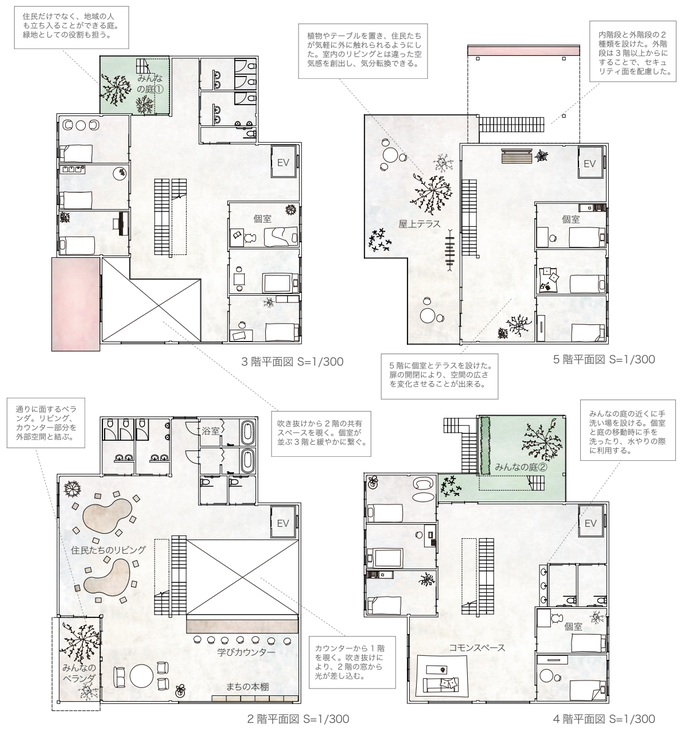
【小さな居場所】
シャッターが目立つ丸五市場にの中に佇むコミュニティスペース。オープンな場所ではなく、隠れ家的場所。

【歓迎する入り口】
カラフルに装飾された市場の入り口。特定の誰かではなく、誰もが自然と立ち入りたくなのではないか。




断面図 S=1/200

南西立面図 S=1/200



1 階 ながたキッチン：地域の人々が『食』を通して交流する。

2 階 みんなの庭：小学校から見える側を彩る。まちの緑地としても機能する。

2 階から 1 階をのぞく：カウンターから 1 階のみんなのリビングの様子を見ることができる。

1 階ながたキッチンからみちにひらく：歩いている人誘い入れるだけでなく、見守る役割をもつ。